

〔巻頭言〕

## 百聞は一見にしかず

小林 秀 樹

しばらく All about AWINE の編集後記を担当させて頂きましたが、このたび編集担当の交代により巻頭言の執筆をすることになりました。何を書こうか、改めて歴巻のそれらを拝読すれば、なるほどと頷けるものばかり。しかも SPF 豚に対する信念が伝わるものばかりでした。正直、巻頭言を執筆するにあたり読まない方がよいと感じたくらいです。なぜって、感心させられるものを見聞きした自分の感性に大きく影響してしまうからです。文章を執筆するにあたり、いや他人との会話においても自分の考えを素直に表現することは大切ですが、その基となる経験や知識がなくてはなりません。経験は自分の言動に対する結果から生まれ、自分なりの基準で成功や失敗と判断するものを積上げたものなので紛れもない事実です。さて、知識はどうでしょうか。知識の源は経験から得られることもありますが、情報化社会にいたってはそのほとんどがマスメディアを通じた文字と音声情報からです。最後のメディアから得られた情報は最初の経験者が発信したそれと本当に合致するものばかりでしょうか。例えば悪意が無くても情報の内容は人を介するたびに少しずつ変化してしまいます。情報を受け取った人はその内容を正確に伝えようとしても、そこに個人の思想が少なからず入ってしまうものです。

先日、中国黒竜江省哈爾濱市にある中国農業科

学院獣医研究所を訪問しました。そこでの研究内容と成果は私の所属する機関よりすばらしいものでした。敷地規模、施設、人員人材、研究費どれをとっても凌駕しており、このような高レベルの研究機関は武漢大学や河北農業大学など他にもいくつかあるそうです。また、年間 60 億ドーズ以上のワクチンが製造可能な大手民間製薬会社が敷地に隣接しており、種々の実験も共同で実施されるそうです。研究所職員が会社の役員を兼ねている場合もあります。このような高度な研究成果や製造が可能になったのは、所謂「海亀族」によるものが大きい。海亀族とは、かつては日本を中心に、近年では北米を中心に数年間留学し本国に帰ってきた人たちです。北米の大学で教鞭を執る精鋭若手を破格の処遇で呼び戻したりしています。研究所には研究員の他に非常に多くの修士・博士課程学生がおり、専ら実験室で仕事をしているのは彼らです。彼らは秀れた研究員の指導の下、技術や知識を十分に身につけることができず海外留学を熱望しています。また指導者もそれを推奨します。研究環境が自所と大して変わらない場所に行く理由は、コネづくりだけでなく、自分の想像を自分の目で確かめ、より発展させたいと考えているからです。海亀族の指導者は個人の価値観の基準はその本人しか理解できないことを会得しています。

日本では海外留学者数が減少しているようで、その背景には経済状況、少子化もあるでしょう。また、自宅に居て高度な情報化社会のツールでも簡単に情報が入手できれば、わざわざストレスの多い海外で勉強する必要はないと考える者もいるかもしれません。しかし、経験なしに膨大な他人情報だけで判断基準を設けることはかなり危険です。一方、SPF豚の研究経緯と成果は将に実践経験の連続であり、嘘偽りのない科学でした。もっとも、この研究段階に於いて関連する情報を得ようにも無かったと思いますが。この素晴らしいSPF豚の技術は既に海亀が持ち帰っていたのも事実です。価値あるものと判断したからです。今後、SPF仕様が中国養豚の基準となったり、日本がTPPに参画したり…。このようなグローバル化される中で日本は更なるSPF豚の高度化を実践する必要があります。

今回、中国の家畜衛生技術のすさまじい進歩に衝撃を感じ、また大連と哈爾濱といった旧満州地

域を歩き、うれしくない言葉を吐き捨てられたりもしました。しかし、哈爾濱獣医研究所は日本陸軍第731部隊とその姉妹部隊関係者、満州残存日本人技術者の大きな協力があり創設できたこと、その後の技術移転にも多くの日本人科学者が協力してくれたこと、ほとんどの50代以上の研究者は日本に留学させてもらったこと等、日本人に対しとても感謝していたのは救いでした。このような歴史が創られたのもface to faceの関係と実践経験があったからこそです。現状をよく観て考えて実践し、他人情報を的確に取捨選択し、また実践していくことの繰り返しこそが大切です。もちろん初めの真白な状況においては、情報収集から始めるのは当然ですが、それらの情報を自分に都合よく解釈する危険性は常にあります。このような場合は芳しくない結果へと繋がっていくことが多いのですが、これらの悪い結果の重積も私の経験のひとつとなっています。